

旬じょうはん

情勢判断学会 東京本部
会員向けニューズレター
発行人 古川 彰久
事務局 〒252-0321 神奈川県
相模原市南区相模台1-23-9
Tel.&Fax.
042-748-8240
<http://www.jouhan.com>
E-mail:info@iki2life.com

4月例会ご案内

日時 : 4月13日 木曜日
18:30 ~ 20:30
場所 : 港区立産業振興センター
10階 会議室3
会費 : 1000円
テーマ : 「東西古今人間学5」後編
テープを聴く
演者 : 古川 元晴

「当たり前のことをやった毛沢東」(後編)

負ける戦はしない

- ①食うことを考え、2万人の軍隊を30万人にしてしまった。そうすると国民党も黙っておられず戦争となる。
- ②ところが、これが大抵勝ってしまう。なぜかという、勝つ戦いだけやって、負ける戦はしないから。
- ③どういう時勝てるかという、まず人数を多く集める。敵の4倍くらい兵隊を集める。こういう時に戦えば、大抵は損害少なく、相手を撃退することができる。

深追いはしない

- ①碁でも、逃げた者を深追いしていくと、相手の仲間がやってきて、必ず囲まれてします。戦いは深追っている、どこかでやられてしまう。腹八分でがまんして、止まる。
- ②この止まる地点を、毛沢東はよく知っている。私も戦場でこのように戦い、生きてきたから、よく分かる。
- ③事業でも同じこと。株の売買と同じ。
- ④毛沢東の戦いを調べると、勝てる戦いだけする。深追いはしない。多数の兵力を結集できない時は逃げていく。逃げれば、山の中だし地理を熟知しているので、いつでも逃げおおせる。

情報収集

- ①近所の村々に貧農が大勢いて、それが共産党の味方だから、どこに国民党がいるか知らせてくれる。
- ②国民党の方には情報がないから、やみくもに進むだけ。兵力は多いが、情報がこなので、手探りで進む状態。
- ③いくら敵の兵力が強くても必ず手薄の所があるものだし、そういうことは毛沢東側には逐一情報が入るので、その情報に基づいて戦えば、効率よく動ける

④毛沢東が成功した戦いの例としての龍興戦役。この戦いで一個師団分の兵器、通信機などみな取り上げ、毛沢東の部隊は完全武装できた。

共産党中央の誤った指導

- ①毛沢東のやり方に党中央から農民主義であるとの批判が出てきた。我々はプロレタリアート、労働者の党だから、農民を主にした戦いのやり方は共産主義の原則からはずれていると批判しだした。
- ②党中央が直接指揮を主張し、コミンテルンを代表してソ連の将校が指導を始め、勝つ戦いだけをするのではなく、「共産党の占領した土地は社会主義の聖地だから、一寸の土地も敵に渡さない」とがんばりだした。
- ③たいした兵力もない少数なのに、がんばり出すと、大勢いる敵はだんだん結集し、攻撃を加えるようになる。もともと兵力のある国民党にどんどん敗けるようになり、結局逃げ出すことになった。
- ④北上長征、2万5千里の大長征、北の方で日本軍と戦うという名目で逃げだし、ここに大長征といわれる行軍が開始された。

教条主義の誤り

- ①当時の共産党の中央は、マルクス・レーニン主義を標榜し、原則で事を運ぼうという人達が指導の地位にあった。陳独秀もその一人だった。
- ②どのような理論かという、中国社会は封建主義の国だから、社会主義社会に行くためには、一度資本主義社会を通過しなければならない。そのためには、ブルジョアジーの革命が必要だと考えていた。
- ③ブルジョアジーの政党である国民党がブルジョア革命を達成するために、国民党にまず天下を取らせる必要がある。それから自分達がプロレタリアートを糾合して社会主義革命をやろうという理論を主張した。
- ④アルクス・エンゲルスの書いた『共産党宣言』に書いてあることをそのまま中国にも適用しようとした。ヨーロッパの現実をみても、現実が一番遅れていたロシアが社会主義をつくり、マルクス主義とは反対なことが起こっているのに、そうした現実は見えていない。そのため、主導権をすべて国民党に預けてしまい、軍隊も、自分が指揮官ではなく、国民党の指揮権の下に動いた。
- ⑤国民党の方は、上海を取れば共産党はじゃまなので、4十数万人の共産党員を虐殺した。上海を追放されて瑞金まで来て、党の中央を作っていたが、陳独秀が退いて、李立三になり、王明になっても、ずっとこの調子だった。

⑥その頃、毛沢東は貧農で飯を食べない連中を集めて革命をやっていたのに、党の中央は全国の労働者に武装蜂起をさせようとして、武器を渡し武漢や上海の労働者を戦わせた。しかし人数は少ないし武器も少ないので、すぐに敗けてしまい、この方針は、国民党に殺される共産党員の人数を増やすだけに終わった。

⑦教条主義というか、理屈だけで現実をみない指導者が上に立つと、大変なわけ。中国ではこのため、三十万人にふくれあがった軍隊が、延安についたときには二万人、という話になってしまった。

⑧日本の社会でも、このような教条主義者はいる。「景気はどうかね」と聞くと、「オイルショック以来不況で、どうもあまり儲からない」と答える人がよくいる。これは、オイルショックで赤字になれば不景気になり、倒産してしまうと図式的に信じ込んでいるからだ。不景気でも、好況部門は必ずあるのだから、そちらの方に目を向ける、独創性のある仕事のやり方を考えなければならない。

確かな現状分析

①毛沢東は、党中央の教条主義的な考え方に対し、自分の行動の正当性を論文の中で明らかにする必要があった。

②彼は、中国の社会は封建社会ではなく半封建社会でもう半分は資本主義社会だとし、中国は国民党に作ってもらうまでもなく、もう半分は資本主義社会なのだから、我々は、あとの半分の封建社会を倒す反封建闘争をするのだということ。封建社会はどこにあるかということ、農村の中にあり、その農村の地主を倒すことに精力を傾ければいいということを行った。

③一方、半資本主義だから、都市の労働者は味方で、これは組織しなければいけない。しかし、まだ都市は国民党の力が強い。強いところからやるのはまずい。弱いところからやる方がうまくいく。農村には地主はいるが、国民党の部隊の多くは都会にいて、その力は農村では弱い。弱いところからやった方がうまくいく。だから農村から初めていく。これは物事をよく見ていなければ言えないこと。

④私もよく「できないことはするな。できることからしろ」と言っている。これは毛沢東とよく似ている。お互いにやっていることをよく見ると、よく同じことをやっていたなと思うことが多い。

⑤勝ち戦だけやり、負け戦はするなとか、弱いところから始め、強いところは後回しにしろ、こういうことは当たり前の話。脳力開発といっても、当たり前のことをやれと言っている。誰でも考えつく、一番当たり前のことをまずやりなさいといっている。

⑥毛沢東は、特別のことをやったわけではない。世界中の人にとって当たり前のことをやっている。当たり前のことをやればうまくいく。

独創を生かす

①井岡山で、毛沢東は、都市での戦いは難しいから、農村をまず組織し、その農村で都市を包囲するという戦略構想を打ち出した。これは毛沢東の独創といえる考え方。

②ソ連の革命はレンングラードなど都会地で起こり、労働者が鉄砲を持って戦った。毛沢東の革命は

農民も貧農をよりどころにして戦い、敵から武器を取り上げ、地主から飯を出させ、やったわけで、これは、農村調査で、農村の実態をよくつかんでいたからできたこと。

2月例会報告

日時 : 2月9日 木曜日
18:30 ~ 20:30
場所 : 港区立産業振興センター
10階 会議室3
テーマ : 「東西古今人間学4」後編
テープを聴く
演者 : 古川 彰久

敵か味方か、戦略決定

何が戦略で、誰が戦略決定をするのか、秀吉は理解して実践していた。

上月城というのは尼子氏一族の領土だったので、毛利に取られ、秀吉は尼子氏援助していたのです。ところが毛利が攻めてきて、兵力量は同じ位でしたので、秀吉は上月城を救うべきか見捨てるべきか迷ったのです。

そこで秀吉は信長に使いをやって決裁を仰いだのですが、信長の返答は見捨てるというものでした。そこで上月城は落ちて、尼子氏一族は滅んでしまうのですが、相手を助めるか見捨てるかということは戦略決定なのです。戦術上の問題ではないのです。相手を味方にするか敵にするか、これは戦略上の問題です。信長がいる間、秀吉という男はどの戦でも戦略決定は信長に従っているのです。

会社の中でも戦略決定と戦術決定はきちんと区別しなくてはいけない、というのはこういう点なのです。社長さんは戦略決定をする。部長さんとか常務さんというのは戦略決定をやってはいけないのです。

ところが明智光秀は戦略と戦術の区分ができなかったのです。光秀は丹波を攻撃して丹波を取るのですが、その時、波多野一族というのがいて頑強に抵抗するのです。光秀は手に負えなくなり、自分の母親を波多野一族に人質として出し、「お前らの命は助けるから何とか降参するように」と言って、波多野一族を降伏させるのです。そして丹波全域を手に入れるのです。

そこで光秀は信長の所に行き、事情を説明するのですが、信長は「馬鹿者め！全部殺せ」と怒るのです。それで、波多野一族は皆殺しになってしまうのですが、波多野の残党は人質になっていた光秀の母親を殺してしまうのです。

これなどは、光秀に戦略と戦術の区分がなかった証拠です。光秀は助めるか殺すかの戦略を決定して信長の所へ持っていったわけですから、信長は戦略決定ができないわけです。

戦略というのは二つの中の一つですから、殺す場合にはどうするか、助けた場合にはどうするか、戦術が決定できない。光秀の場合はそのよい例で、母親も失ってしまったといえると思います。

小牧・長久手の戦い

秀吉という男は、実に戦略決定のうまい男だといえると思います。その一番よい例が、小牧・長久手に表れていると思います。

小牧・長久手というのは、小牧が主戦地で長久手で戦闘をやったのです。信長が死んでから秀吉の勢力が大きくなったのですが、信長の子供、織田信雄はおもしろくなくて、秀吉に反抗するわけです。そこで信雄は、秀吉をやっつけると徳川家康に泣きついたのです。家康は信長の同盟者ですから、信雄に加勢して秀吉に対抗しました。秀吉は信長の部下でしたが、家康は同盟者であっても部下ではなかった。その秀吉の勢力が大きくなってきたので、家康は自分の力を誇示しておこうとでも思ったのでしょう。

秀吉はこのとき小牧に陣を取り、総兵力約十万、対陣する家康方約三万。兵力からいっても秀吉の方が有利です。しかし彼は家康と対陣して、じっとしていました。小説では家康が怖かったからなどと書かれていますが、決してそうではない。秀吉はそんな小物ではありません。

彼はこの時戦略を考えていたのです。戦略とは、つまり天下統一、天下統一するためにはあと五つの障害を突破しなければならない。まず島津、小田原の北条、伊達等をやっつけなければならないと考えていたわけです。こういう戦略を立てていましたから、ここで兵力をなくしたくなかったのです。だからこの10万の兵力を失うことなく、家康をこちらの味方にする方法はないかと、考えていたと思います。

秀吉は家康に勝ち戦をさせたのです。というのは家康というのは家柄のある男ですから、負け戦になったら撤退しながらも最後まで戦うだろうと見抜いたのです。そうすると戦いは長引き、失う兵力も大きい。そうしないためには相手に勝ち戦をさせ、こちらから講和を結べばよいと考えたのだろうと思います。

天下を取る戦略

秀吉の部下に池田勝入齋という男がいたのですが、この池田が秀吉にある作戦を真言したのです。というのは、今、家康は本国の三河を空にして出てきているから、私たちが三河に侵入して攪乱しましょう。家康は驚いて本国に兵を返すでしょうから、その時にあなたは家康を責めればよいでしょう。というのです。

これは家康という人物を考えた場合、大変無謀な策なんです。相手のホームグラウンドに入るわけですし、情報網だってしっかりしているから必ず見つかる筈なのです。秀吉はこのあたりのことは見抜いて当然なのですが、この無謀な策に対してOKの返事を出してしまうのです。

最初、このことをとって不思議に思ったのですが、後から考えてみると、十分納得できたのです。そこで池田勢と、彼と一緒にいった森勢らはどうなったかという、長久手で家康方に急襲されてしまうのです。ここで推進作戦は見事に失敗してしまうのです。

この長久手の戦いで「家康は強かった」などといわれるのですが、私はそうは思わないのです。自分

のホームグラウンドに入ってきた兵士の情報も取れないでいるような司令官だったら馬鹿者です。急襲できて当たり前なのです。

不思議なのは、一万何千人の池田と森の兵士の損害が約千人なのです。本当なら全滅している筈なのに、しかも徳川勢の討ち死に者は七百人ぐらいです。人数的には徳川勢の方が少ないのですが、比率的には徳川勢の方が余計に死んでいるわけです。しかも、このとき秀吉の本体は動いていないのです。家康を本当にやっつけるつもりなら、相手が手薄になったときに攻める筈です。だから私は、いろいろな歴史家や小説家が書いているように、「これは家康の采配がうまかったから」とは全然思わないのです。

これは秀吉の戦略からいって、損害を出さないで家康を味方につけるためには、家康に勝ち戦をさせなければならない。そして彼と講和条約を結ぼうという、秀吉の戦略だったと思うのです。相手を勝たせておけば、戦力的には秀吉の方が三倍以上の戦力でまさっているのですから、お互いに対等の立場で講和が結べるのです。

秀吉はこういう作戦を立てたと思うのです。そう考えてみると、彼の行動というものがよく理解できるのです。この合戦の間、彼は家康を一度も攻めることなく、信雄に味方した小さな城を打ち取っているのです。それは見事なほどきれいに討ち落としています。

とうとう信雄は秀吉に降参して、単独講和を結んでしまうのです。つまり、家康に泣きついて秀吉を攻めたのに、家康はまだ秀吉と対陣しているのに、信雄は単独で降参してしまうのです。

家康としては立場がなく、戦う名目もなくなってしまいます。そして、ちょうどこの時になって秀吉が、勝たせた家康に「どうです、講和しようじゃありませんか、お前さんが勝っているのですから」と持ちかけるのです。さすがの家康も秀吉の戦略に見事にひっかかるのです。そのあと秀吉は、家康を持ち上げて、結婚していて妹を離縁させて家康のところへ送りつけたり、母親までも娘に会いに行けといっ、家康のところへ送っているのです。

家康の方からすれば、妹と母親を人質に出してよこしたんだと思いますから、これはもう断り切れないのです。しかも面目は全然失っていないのですから、余計に断れないわけです。

講和を結んだあと秀吉は家康に、「どうです。嫁ももらったし、京都に遊びに来ませんか」と誘うのです。家康としては秀吉に転嫁を取られたと思うのですが、「まあ、仕方がない、俺にこれだけできるのだから天下は秀吉のものだ、あとは島津と北条をやっつけるだけだから、ここで反抗すると滅んでしまう」と考えるわけです。しかも講和を結んでいるわけですから、立場は対等です。秀吉の部下ではないから、家康の面目も保たれているわけです。そして、とうとう秀吉の部下になってしまいます。

こういうふうに見てきますと、小牧・長久手の戦いというのは、戦術的な戦の問題ではなく戦略的な戦なんです。最高戦略の観点からみて戦争をしているのだと思うのです。

